



第7回 ふくしま学(楽)会



ふくしまから伝えたい事、知らなければいけないこと
1F廃炉の先と地域社会:「復興と廃炉の両立」を考える

「1F廃炉の先研究会と地域社会との対話について」

崎田裕子 NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット・前理事長

吉田恵美子 NPO法人ザ・ピープル理事長、
いわきおてんとSUN企業組合代表理事

1F廃炉の先研究会(早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター)

2021年1月24日

1

2021.1.24 1F廃炉の先研究会

「地元」参加の研究会メンバーとして議論に加わる



吉田 恵美子 (よしだ えみこ)

特定非営利活動法人ザ・ピープル理事長
いわきおてんとSUN企業組合 代表理事

福島県いわき市在住

一旦教壇に立ったが、福島県いわき市に戻り専業主婦となる。社会とのつながりを求め、仲間と1990年ボランティアグループ「ザ・ピープル」を立ち上げ、古着リサイクル活動を中心に住民主体のまちづくりを实践。東日本大震災後、被災者・避難者支援活動をきっかけに「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」など、地域のNPOの連携組織が牽引する住民自らの手による未来創りに取り組む。

早稲田大学ブックレット「フクシマから日本の未来を創る」(松岡俊二
いわきおてんとSUN企業組合 編)の執筆に関わる

「地元」住民として発言することの難しさを感じながら原発事故を語る



対話を文化に～みんなでふくしまの未来をかたろう～
持続可能な地域をつくる「連携」と「共創」の
つなぎ手として、「1F廃炉の先研究会」に参加



「電気のごみ～地層処分
最前線を学ぶ たび」
NPO共著 2010
2007～2017全国で地域WS



「みんなでつくる
オリンピック・パラリンピック」
NPO共著 2015
2015～持続可能な東京2020大会に



「エコギャラリー新宿」指定管理者
NPO新宿環境活動ネット代表理事
2004～市民・企業参画型運営
で環境まちづくり推進



2011～2018
「環境回復」勉強会

2012～「環境再
生プラザ・相談員
支援センター」
運営支援

2016～2020
「ALPS処理水
小委員会」

1974立教大学社会学部卒・出版社で編集者・1985フリーランスに
崎田裕子 ジャーナリスト・環境カウンセラー²
NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット 前理事長

「1F廃炉の先研究会」は ふくしま浜通り社会イノベーション・イニシアティブ(SI構想)から誕生 早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター

SI構想は2050年に、常磐炭鉱(いわき)、広野火力(広野)、2F(楢葉・富岡)、1F(大熊・双葉)、アーカイブ拠点施設(双葉)、復興祈念公園(双葉・浪江)、原町火力(南相馬)と南から北へ続く「エネルギー産業遺産・原発事故遺産・震災復興施設のネットワーク」を作り、1Fやエネルギー遺産群を核とした地域アートを展開することで地域の新たな魅力を創造し国際的芸術・学術拠点を形成することで、21世紀のレオナルド・ダ・ヴィンチを育成する。

- ① 1F廃炉プロセスの地域資産化
1F Heritage 構想
- ② 文化芸術活動の展開による新たな
地域の魅力や価値の創造
広域地域経営制度の形成
- ③ 福島をの教訓を未来世代へ発展的に継承
国際芸術・学術(Arts & Sciences)拠点

以上の3点の社会イノベーションを創造すれば、
2050年に交流人口・関係人口が100万人を超える。 2021.1.24 1F廃炉の先研究会



ふくしま浜通り社会イノベーション・イニシアティブ（SI構想） 提案① 1F廃炉プロセスの地域資産化 の具体化へ

「1F廃炉の先研究会」（松岡俊二代表）（森口祐一副代表）

2019年7月29日：1F廃炉の先研究会の設置

2020年5月 6日：「中間報告」を作成。報告の提案内容の実装めざす

5月17日：福島・地域対話会合（地域社会+研究会）の開催

8月28日：東京電力との会合（東京電力+研究会）

10月29日：3者会合（第1回）（地域社会+東電・国+研究会）

11月26日：3者会合（第2回）（同）

12月17日：3者会合（第3回）（同）

2021年1月12日：追加3者会合（第4回）（同）「1F廃炉プロセスの
地域資源化プラットフォームの提案」作成TF設置

1月24日：第7回ふくしま学（楽）会

1月～3月：「地域プラットフォーム提案」（3者会合報告書）作成

7月頃：1F廃炉の先を考える地域プラットフォーム（仮）立上げ

2021.1.24 1F廃炉の先研究会

1F廃炉の先研究会「中間報告」（2020年5月6日）

目次

要約

- 1F廃炉の先研究会と中間報告
 - 1.1 研究会の目的と中間報告
 - 1.2 研究会の構成
 - 1.3 研究会の経緯
- 1F廃炉のリスクと廃炉政策
 - 2.1 1F廃炉のリスク
 - 2.2 1F廃炉政策と「中長期ロードマップ」
- 技術的側面からみた1F廃炉の先
 - 3.1 1F廃炉の先（End State）の4つのシナリオ
 - 3.3 検討すべき課題
- 社会的側面からみた1F廃炉の先
 - 4.1 1Fの社会的価値
 - 4.2 検討すべき課題
- 1F廃炉の先の論点
- 1F廃炉に関する基本資料サイト

参考文献

2021.1.24 1F廃炉の先研究会

結論・提案

1. 1F廃炉の技術的側面と社会的側面を統合した社会的議論の形成

2. 多様な「廃炉の先のオプション」を示し、幅広い地域社会の住民や専門家、行政の1F廃炉のあり方に関する討議プロセスを立上げる

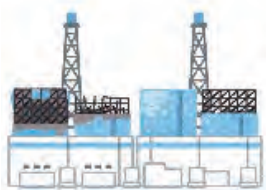
3. 1F廃炉の先とは、40年後100年後の絵を描くだけでなく、中間ステートや廃炉の先へ至る地域内外の多様な人々が関わる廃炉プロセスそのものを地域資源化する仕組みづくりを提案

対話・議論のプロセスの重要性

1F廃炉の先研究会作成

我が国における対話のスタイルと課題

専門家のみで決めてから市民に理解を求めているという手順	事実隠蔽や議論回避では
単なる批判でなく自身の問題として捉える参加意識の欠如	無関心や批判のみの議論
どんな議論をしても最終的な政治的判断には反映されない	対話に対する諦めや拒絶



専門家・技術者も
分からない課題
科学技術では答えが
出せない課題



情報公開と情報へのアクセスの確保
選択肢を明示する議論が必要

世代を超えた長期的・継続的な議論
次の世代に引き継ぐ議論が必要

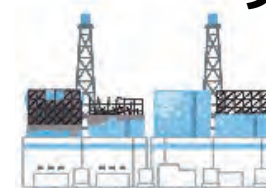
立場を超えた議論や
立場の違いを理解する議論が必要

住民や自治体の判断を超えた対応
国民的・国際的議論が必要

2021.1.24 1F廃炉の先研究会

7

プロセスの地域資源化



専門家・技術者も
分からない課題
科学技術では答えが
出せない課題



科学や技術で
解決できない課題を
社会がどう受け止めていくか



社会
イノベーション
記憶の伝承
事故の教訓

対話・協働・伝承の
プロセス自体を
地域資源化する

対話という
知的体験観光

対話による
教育・人材育成

対話からの
新しい技術開発

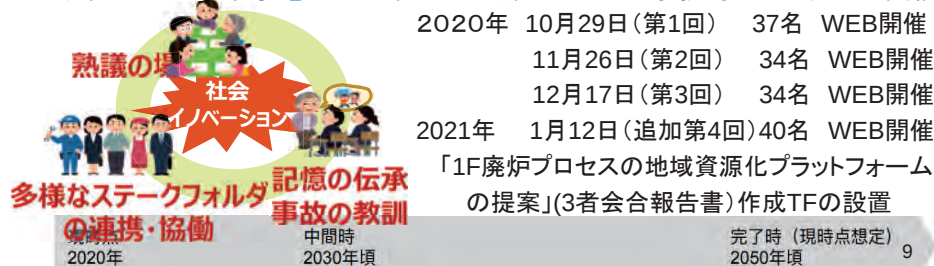
1F廃炉の先研究会作成

2021.1.24 1F廃炉の先研究会

8

地域社会、東電、研究会、3者の討議プロセス立ち上げ 1F廃炉プロセスの地域資源化に関する地域対話会合 3者会合のねらい

- 「復興と廃炉」を両立した浜通りの将来像を共有するための、
1F廃炉の技術面と社会面を統合した、多様な主体の「対話の場」
- 廃炉プロセスを地域資源化し、復興とつなぐ「プラットフォーム」を
共に考える。
- 事故後の10年、地域社会と東京電力は対立構造だった。未来に
向けて、研究会が仲介役を担い、両者の対話プロセスを進める。
- 地域社会18人+東京電力5人+国2人+研究会12人+事務局4人で、WEB開催



2021.1.24 1F廃炉の先研究会

3者会合に参加する「1F廃炉の先研究会」メンバー

(研究会代表)

松岡俊二: 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・教授

(研究会副代表)

森口祐一: 国立環境研究所・理事、東京大学大学院工学系研究科・教授

(メンバー)

遠藤秀文: 株式会社ふたば・社長

井上 正: 電力中央研究所・名誉研究アドバイザー

小林正明: 中間貯蔵・環境安全事業株式会社・社長

宮野 廣: 日本原子力学会・福島第一原子力発電所廃炉検討委員会・委員長

永井祐二: 早稲田大学環境総合研究センター・研究院准教授

小野田弘士: 早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科・教授

崎田裕子: NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネット・前理事長

菅波香織: 未来会議・事務局長

柳川玄永: 三菱総合研究所原子力安全事業本部地域共生グループ・主任研究員

吉田恵美子: NPO 法人ザ・ピープル理事長、いわきおてんと SUN 企業組合理事長

10

2021.1.24 1F廃炉の先研究会

1F廃炉プロセスの地域資源化に関する地域対話会合(3者会合) (第1回) 主な議論: 2020年10月29日18:00~20:00

出席者37名: 地域社会14、東京電力5、経済産業省2、研究会12、事務局4
自己紹介、主旨・目的共有し、1F廃炉と復興に関する思いを自由に意見交換。

1. 情報共有のあり方と対話の場づくり

- ・津波や事故を次世代に語り継ごうとしてきたが、廃炉のことはわからない。
特に若い世代は廃炉情報から取り残されている。関心ない人も増えている。
- ・対話の場が必要。長期的視点で教育の場での経験の継承も必要。

2. 廃炉と地域の将来

- ・廃炉と地域活性化と言われても、地域では可視化できない。
廃炉完了後どうなるのか。どう考える? 誰が考える? その枠組みは?
- ・大事な事を決めるときに、住民に聞くスタンスあるのか。一方、住民も
伝える工夫できてなかった。協力して新しい発見につながれば。
- ・今後地域をどうしてゆきたいのか、世代を超えた対話のプロセス重要。

- ・廃炉をどう地域に活かすのか。廃炉にどう地域の声を活かすのか。
そこに廃炉プロセスの地域資源化の喫緊の意義がある。
- ・情報発信、記憶の継承、対話の場の形成、廃炉と地域の将来の深堀り。

2021.1.24 1F廃炉の先研究会

1F廃炉プロセスの地域資源化に関する地域対話会合(3者会合) (第2回) 2020年11月26日18:00~20:10

出席者34名: 地域社会13、東京電力5、経済産業省2、研究会10、事務局4
・前回抽出した論点を3者混合の3グループで議論。全体討論で共有と深堀り。

論点1. 情報発信

- ・情報発信をしても少ないイメージがある。地域住民への発信の工夫を。
- ・1F視察など体験が効果的。東電と地域社会の関係性をとり戻すこと重要。
- ・トラブル発生時はニュースになるが、普段の廃炉情報少なく状況わかりにくい。
- ・関心のない世代が増加。浜通りの情報発信施設を活用して学生の興味を。

論点2. 記憶の継承

- ・高校生は自分事として震災を語れる最後の世代。次世代への継承が急務。
- ・シンボリックな原発遺構などを残すべきかも対話が必要。広い議論を。
- ・廃炉プロセス自体を社会に見せる仕組みを考えてもいいのではないかと。

論点3. 対話の場の形成

- ・地元住民や高校生など次世代と、東電が交流する機会はほとんどない。
- ・対話の場はいくつかあるが、廃炉の関心層だけでなく話の輪が広がる場を。
- ・多世代・多分野の人が、フラットな関係で対話できる場づくりと継続が大切。
建設的な対話を設定・運営できる事務局的な組織が必要ではないか。

12

2021.1.24 1F廃炉の先研究会

1F廃炉プロセスの地域資源化に関する地域対話会合(3者会合) (第3回) 2020年12月17日18:10~20:10

出席者34名: 地域社会14、東京電力4、経済産業省1、研究会12、事務局3
東電「1F廃炉事業の現状と今後」報告後、3者混合3グループで議論し、深堀り

論点4. 1F廃炉の先と地域社会の将来像

- ・雇用創出は重要。廃炉産業だけでなく、廃炉の先を見据えた産業興しも大切。
- ・地域の将来像の議論には多くの若者を含め、年代や分野を超えて対話し、地域課題を共有し、中長期の将来像を共にデザインしたい。
- ・原発災害で大変なまちではなく、将来のためにみんなで協働するまちとして、プロセスを発信したい。そのため広報誌を地域で発行してはどうか。
- ・東電の説明を地域が聞く一方通行だけでなく、廃炉プロセスで東電と地域の接点が欲しい。例えば原発遺構の保存など、対話の場で選択肢を共に考えては。

- ・10年の節目の時期にあたり、将来を見据え、地域、東京電力、広く社会が、復興のため何をめざし、どう協働するか、未来に向けて考えるプロセスとして地域対話会合(3者会合)を設定し、運営してきた。
- ・廃炉プロセスの共有への意欲を踏まえ、第4回を追加し廃炉と復興の両立につながる対話と協働の場として、プラットフォームづくりを具体的に検討する

2021.1.24 1F廃炉の先研究会

13

1F廃炉プロセスの地域資源化に関する地域対話会合(3者会合) (第4回) 2021年1月12日18:00~20:00

出席者40名: 地域社会17、東京電力5、経済産業省3、研究会12、事務局3
対話の深化に向けて第4回を追加。

「1F廃炉プロセスの地域資源化に関するプラットフォームについて」議論。

まず3者混合の3チームで話し合い、全体討論で共有し深堀りした。

1F廃炉プロセスの地域資源化に関するプラットフォームについて

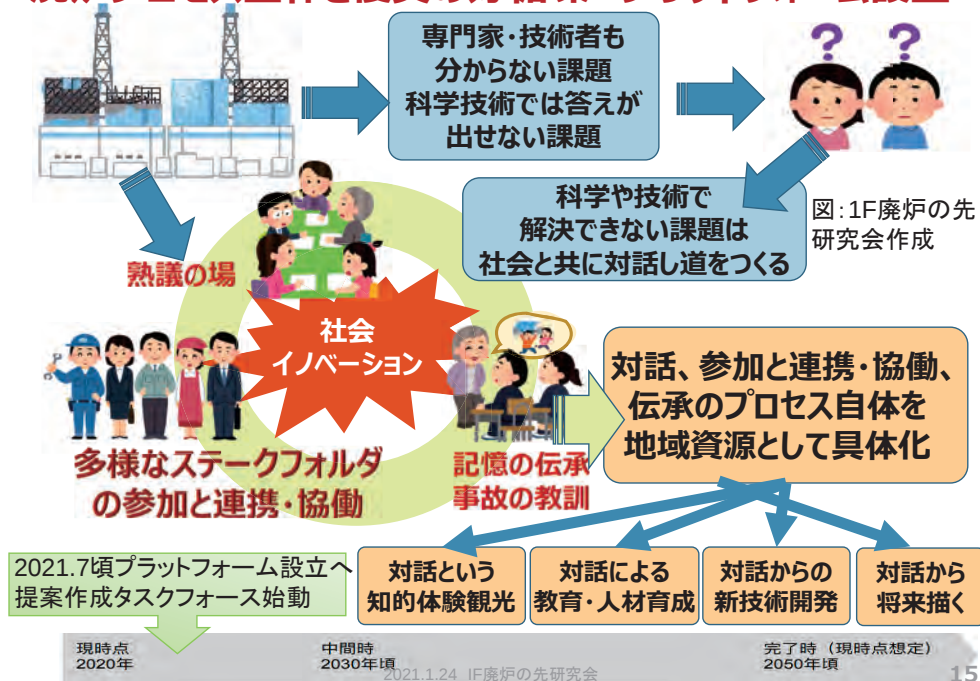
- ・許す許さないの立場を超えたフラットな場を、地域と東電と共に作りたい。
- ・地域社会に広く価値を認められる場になることが大切。
- ・廃炉を通して残すものと、なくすものを、東電と地域と一緒に話したい。
- ・廃炉と地域経済や、次世代への継承など、多様な選択肢に対応できる場に。
- ・技術や環境、デジタル化含め、新しい姿を日本や世界に発信できる場に。
- ・廃炉に関する会議体など存在するが、既存の場とつながれる場に。

3者会合報告書として「1F廃炉プロセスの地域資源化に関するプラットフォーム提案」(仮)作成に向け、タスクフォースを参加者の合意で設置した。

14

2021.1.24 1F廃炉の先研究会

廃炉プロセス全体と復興の好循環へプラットフォーム設立



15

地域対話会合(3者会合)の成果と今後の展開

- 「1F廃炉プロセスの地域資源化に向けたプラットフォーム設立」を地域社会メンバー・東京電力・研究会が共にめざすことを共有
- 提案(3者会合報告書)を作成するタスクフォース(TF)を設置。

地域資源化のプラットフォームの具体像には、多様な思いがある。しかし地域社会と東京電力の熟議プロセスを経て、共創への基本的意欲を確認。

廃炉プロセス全体と復興の好循環を創造する 地域社会と東京電力をつなぐ参加型・熟議型のプラットフォームに

- 廃炉と福島を多様な視点で議論し、考え、行動できる場に
- 地元住民の方々だけでなく、この地域の将来を思う人が参加できる場に
- 双葉地方自治体、環境回復・廃炉・復興の関連組織等とつながれる場に
- 若い世代と共につくるために、教育の力とも連携する場に
- 持続可能な地域の未来に向けて、交流人口拡大につながる場に……

3月「1F廃炉プロセスの地域資源化プラットフォーム提案」(3者会合報告書)
4月以降、プラットフォーム立ち上げをめざす。

2021.1.24 1F廃炉の先研究会

16

2021年度「1F廃炉の先を考える地域プラットフォーム」立ち上げへ

- 2021年1月24日(日)第7回ふくしま学(楽)会、オンライン開催
- 1月～3月 地域プラットフォーム実現に向けたタスクフォース
- 3月公表「1F廃炉プロセスの地域資源化に向けたプラットフォーム提案」
- 7月頃「1F廃炉の先を考える地域プラットフォーム」(仮)立ち上げ



コロナを乗り越え、対面会合ができる日を願って・・・(左:松岡代表、右:森口副代表)7
2021.1.24 1F廃炉の先研究会

地域対話の中での気づきと次への展開

- ・ 地域住民として自らを将来を描く主体として捉える
- ・ 地域課題を世代を超えた対話の中で考える
- ・ 将来世代のために引き継ぐべきものは何かを考える
- ・ 人類として初めて向き合う課題への解を導き出そうとする
取り組み自体が地域資源となり得るという認識を共有する



対話のためのプラットフォームを如何に地域内に形成、拡大するか？

～「地元」参加の研究会メンバーから～

「廃炉の先」を考えるにあたって

- ・ 発災後3, 40年での廃炉という時間軸での議論は妥当か？
- ・ 国と東京電力のみが地域の将来に責任がある主体なのか？
- ・ 専門家からの情報が地元住民に届いていないのはなぜか？
- ・ 原発立地地域の特定のエリアのみの問題としていいのか？
- ・ 地域住民の当事者意識の薄れは食い止められないのか？
- ・ 現世代の価値観で物事を判断していいのか？
- ・ 地域住民は自らの意思を持てているのか？示しているのか？



情報発信・記憶の継承・対話の場の形成について関わるべき
人がフラットな立場で共に考える場＝**地域対話**

地域対話会合への 参加から考える

ふたば未来学園高等学校
教諭 鈴木 知洋

コミュニティ

- 地縁型コミュニティ
同じ地域に住むという地域の縁でつながる
- テーマ型コミュニティ
興味・関心の対象によってつながる
- タスクフォース型コミュニティ
特定の地域課題（タスク）解決のためにつながる
「1F 廃炉プロセスの地域資源化というタスク」

対話の場

- 地縁型Cでは、暗黙の了解で活動が進むことが多く、参加者間で思いがずれているケースも。自身が参加する地縁型Cでも思いあたる節が
- 地域の課題や未来の方向性について、ゼロから本音で話す対話の場は、地縁型Cを再生し、活性化するために大切
- タスクフォース型Cでは、地域の特定課題に関連する様々な深い思いを共有するための場づくりが必要不可欠

2種類の対話

- 内省的な対話
自分の心の内面に反響させ、気づきを得る
- 生成的な対話
参加者が個人の立場・見解・思いから離れ、集団の大きな対話の流れに乗ることで、共通認識を得る

対話によるコミュニティの進化

- レベル1 他人ごと化段階
- レベル2 対象化段階
- レベル3 自分ごと化段階

チームスポーツで、仲間のミスで失点したとき、ミスに直接関与していない人もメンバー全員が失点を自分ごととして捉え、自分とチームのプレーを見直せるのが真に強いチーム

最後に

- 公共空間の保障

国家の権力機構から独立した市民社会の公共的な空間が失われてきて、本来はそこで市民によって形成されるべき公共的意見が宣伝・広告によって操作されるようになってきている
(ハーバーマス)

楽しくほっこりするだけではなく、時には簡単に答えを出さず、対立したまま別れることができる公共空間がほしい (ロバート キャンベル)

第7回ふくしま学（楽）会 「地域の未来世代から」

磐城高校2年 笠井智貴

自己紹介

- 。学校の総合探求(地域の課題について探究する活動)をきっかけに、廃炉や福島のことに関心を持つ。→以前学年の前で探求成果発表。
- 。事故当時小学1年生。下校中、横断歩道を渡っている際に地震発生。
- 。理系ではなく文系。法律関係に関心がある。

そんな未来世代の私が考える 福島の問題とは？

廃炉のプロセスの継続、継承

事故の記憶があるのは、現在の高校生ぐらいまで！？

原発構内での作業、原子力工学の研究など
さまざまなカテゴリーでの人手不足に！？

ということか

私たち(現在高校生)よりも若い世代(未来世代)は、
実際に原発事故を体験していない、または記憶にない可能性が高く、
私たちよりも事故のことを身近に考えることが難しい。



そもそも廃炉のプロセスに

関心を持ちにくい

より難しくする要因も！？

[朝日新聞デジタル](#)

>

記事

英国のコロナ流行、福島原発廃炉に影響
装置試験に遅れ

[福地慶太郎](#)

2020年12月6日 9時15分

30年以上はかかると
言われている廃炉作
業

コロナという一見関係ない
別の事象の影響も
受けてしまう

何年以内ということが見通せない！
しかしこれからの廃炉を担うのは私たち、未来の世代！

私が考える継承のためのステップ

継承方法を話し合う(できるだけ幅広い世代の人と)



積極的に実践してみる



実践するなかで、ベストなものを選ぶ

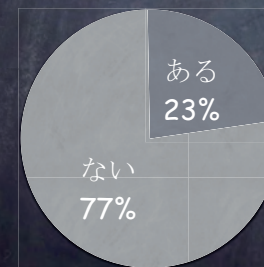
取り組み紹介

- 。 さまざまな方面の方と廃炉について定期的に話し合う会合に参加
- 。 実際に1Fを見学(2回、うち一回は5号機内部まで)
- 。 アンケートを磐城高校生に実施。(次にスライドで紹介)
- 。 自分なりにスライド等に考えをまとめる

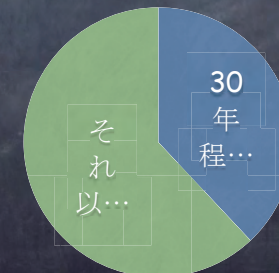
アンケート結果

(対象 磐城高校2年生 60名)

知らない世代に原発事故
とを伝えることへの抵抗



廃炉は何年かかる？



廃炉を若い世代に
つなげることは？



まとめ

廃炉の継続及び継承は大変難しいことである。

しかし震災から10年が経とうとしている今、
私自身だけでなく、様々な世代の方々が考えることで、
少しでも良い方向に進むことができれば良い

Special thanks

開沼博先生(社会学者、立命館大学衣笠総合研究機構准教授)

菅波香織さん(弁護士、未来会議事務局長)

ふくしま学(楽)会に関わる全ての方々

マイクラで創る双葉郡

ふたば未来2年 猪狩大樹 渡邊快 山内直 菅波竜人 森俊輔
浅川悠

双葉郡の課題

- 双葉郡から震災がなくなっている。

活動動機

- 原子力発電所を残した町づくり
- 風化させない

活動目標

- 原子力発電所を遺構として残していく
- 原子力発電所を活かした町づくりを提案する
- マイクラ使ったVRで事故を自分で感じれるようにする

現段階の状況

- マイクラでの反応を見るためにふたば未来学園を作っている
- 提言の草案を作っている

現在のマイクラ



これからの活動計画

- 学校を完成させる
- 原発の制作を進める
- 提言を深めていく
- マイクラや提言の宣伝方法を考える
- 引き継ぎについて考える

主に考えられる課題

- 原発を残したくない人との衝突
- 遺構化や町づくり、原発に対する知識

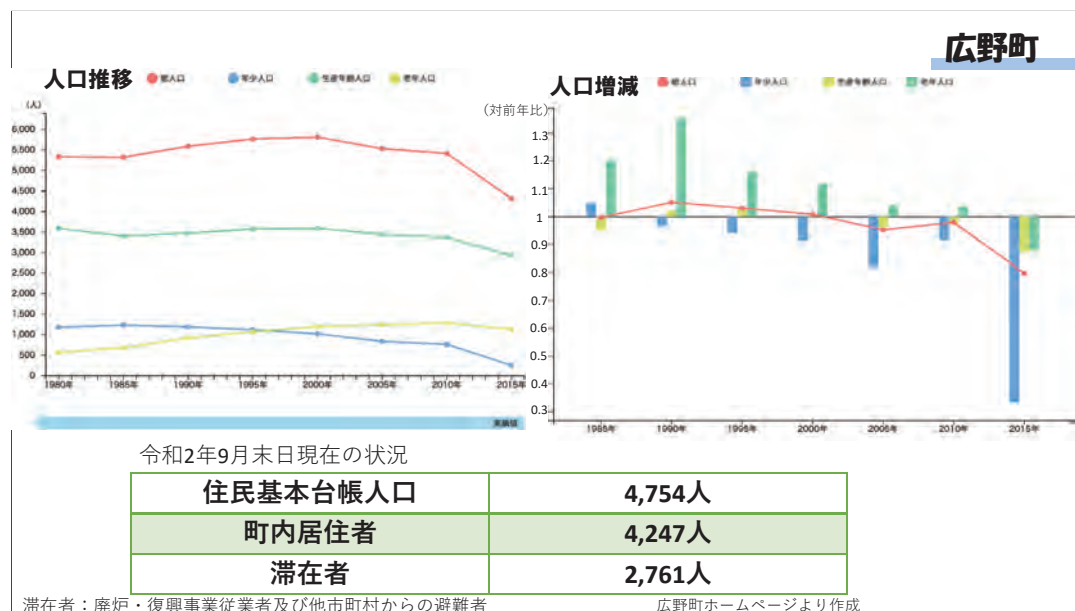
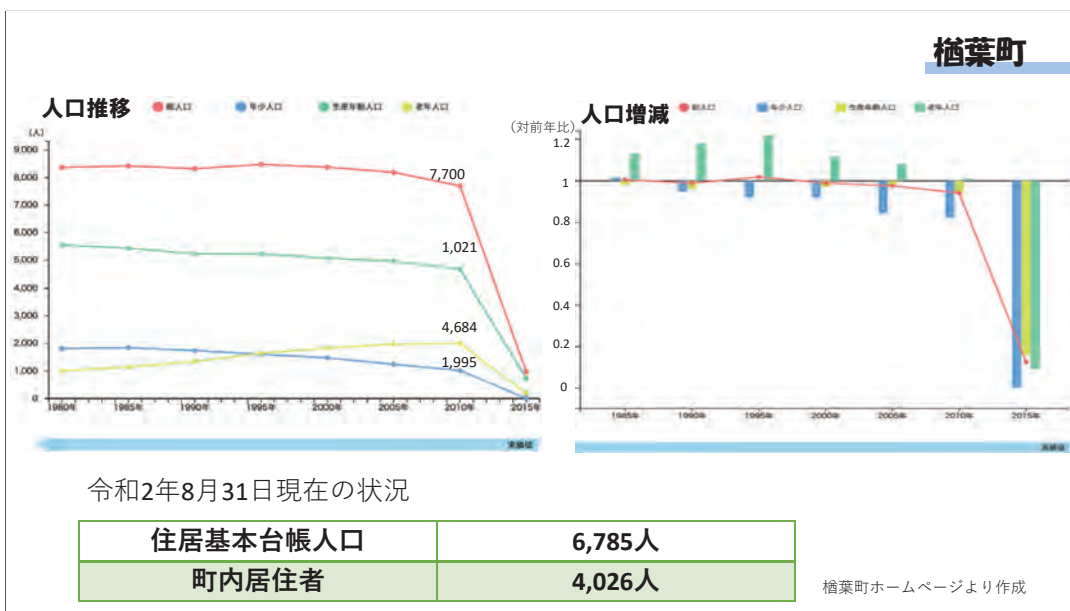
エネルギーからエコロジーへ

シビックプライドを形成する環境事業

ふたば未来学園高等学校 2学年
木田莞奈 草野真綸

檜葉町・広野町の問題

- ・少子高齢社会
- ・人口減少(震災前に比べ、約半分の居住)
- ・従業者が少ない
- ・企業・事業所が少ない
- ・経済循環が悪く、町の産業の基盤が崩壊
- ・産業に偏り



双葉郡 8 町村

人口ピラミッド

福島県榑葉町、福島県広野町、福島県喜望峯町、福島県川内村、福島県大熊町、福島県双葉町、福島県浪江町、福島県葛城町

2010年

2015年

原発作業員の方も含まれる

女性の生産年齢人口が少ない

震災前と人口構成が大きく変化

年少人口が少ない

高齢者の割合が大きい

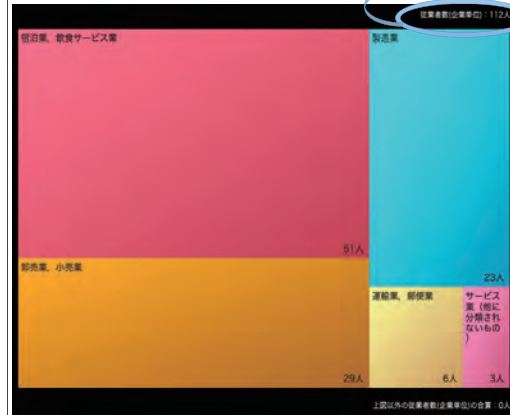
老年人口 約11%
生産年齢人口 約10%
年少人口 約3%

従業者数（2016年）

榑葉町

1,913人（2009年）

112人

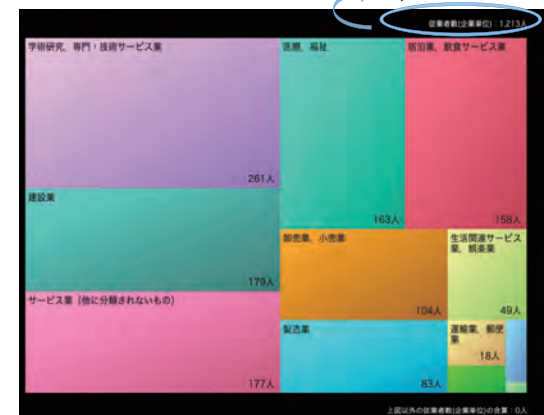


生産年齢人口の約2割

広野町

1,345人（2009年）

1,213人



生産年齢人口の約4割

地元で働く人が少ない

事業所数（2016年）

榑葉町

348事業所（2009年）

53事業所



広野町

274事業所（2009年）

204事業所



ほぼ同じ人口規模の只見町では、267事業所

他地域・震災前と比べ、少ない

企業数（2016年）

榑葉町

253社（2009年）

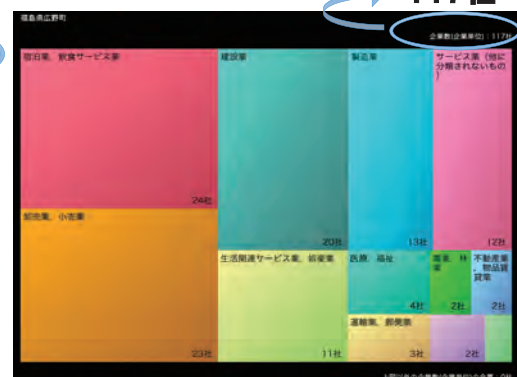
10社



広野町

190社（2009年）

117社



ほぼ同じ人口規模の只見町では、234社

他地域・震災前と比べ、少ない

植葉町

地域経済循環率
239.4%

地域経済循環図 2010年

固定地域：福島県郡市

地域経済循環図 2015年

固定地域：福島県郡市

2010年 地域経済循環図

生産（付加価値額）
962億円

所得への分配
474億円

所得からの支出
402億円

支出
402億円

支出による生産への還元
962億円

注：1次産業 2次産業 3次産業

2015年 地域経済循環図

生産（付加価値額）
271億円

所得への分配
377億円

所得からの支出
525億円

支出
270億円

注：1次産業 2次産業 3次産業

支出

（億円）

項目	2010年	2015年
地域外への流出	151	188
地域外からの流入	423	270
地域外からの引当	497	270

民間消費額 民間投資額 その他支出

原発産業に依存していたため、
周辺産業も衰退し
循環率が非常に悪い
産業基盤の崩壊

広野町

地域経済循環率 138.8%

地域経済循環図 2010年

固定地域 稲巻島広野町

所得への分配 374

生産（付加価値額）

第1次産業 第2次産業 第3次産業

所得からの支出 269

支出

第1次産業 第2次産業 第3次産業

分配（所得）

第1次産業 第2次産業 第3次産業

支出による生産への還元 374

地域経済循環率 86.2%

地域経済循環図 2015年

固定地域 稲巻島広野町

所得への分配 553

生産（付加価値額）

第1次産業 第2次産業 第3次産業

所得からの支出 641

支出

第1次産業 第2次産業 第3次産業

分配（所得）

第1次産業 第2次産業 第3次産業

支出による生産への還元 553

産業	2010年 (%)	2015年 (%)
第1次産業	40.5%	40.5%
第2次産業	52.5%	52.5%
第3次産業	6.0%	6.0%

3次産業に頼っている

檜葉町よりは循環率は良いが、
震災前より悪い

広島市
産業構成
の割合

地域	1次産業 (%)	2次産業 (%)	3次産業 (%)
広島市	0.8%	43.2%	56.0%
広島県	0.8%	43.7%	55.5%
広島市 広域市	0.8%	36.0%	63.2%

1次産業 (0.8%) 2次産業 (43.2%) 3次産業 (56.8%)

火力発電

指定地域

地域	電気業 (%)	公営 (%)	住宅賃貸業 (%)	小売業 (%)	教育 (%)
指定地域	66.5%	5.9%			
広島県平均	10.3%	10.9%	10.1%	7.6%	4.4%
全国	10.5%	10.8%	6.9%	7.8%	6.6%

3次産業の中でも偏りがある

火発産業に依存

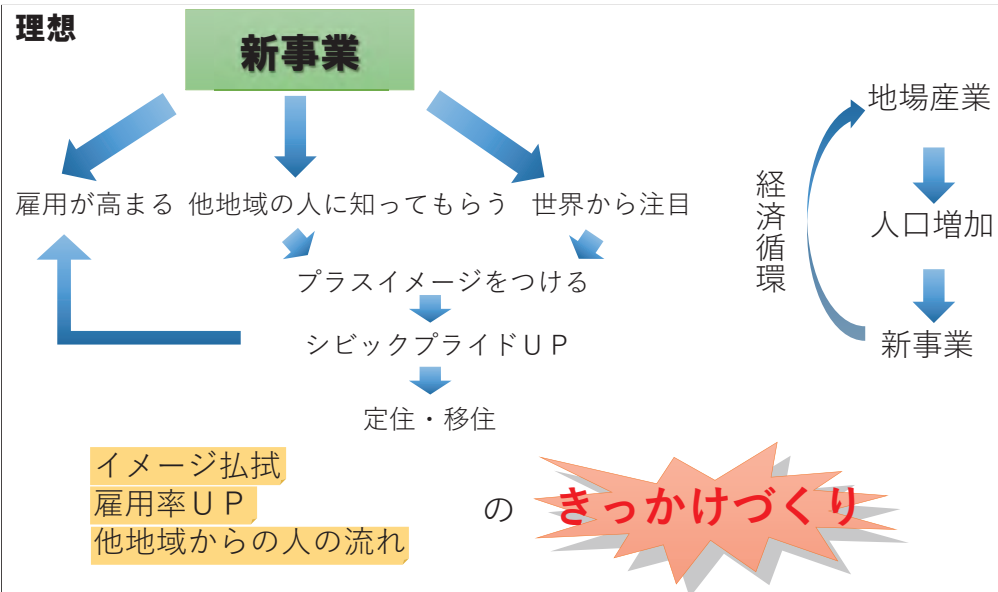
楢葉町・広野町の問題

- ・少子高齢社会
- ・人口減少(震災前に比べ、約半分の居住)
- ・従業者が少ない
- ・企業・事業所が少ない
- ・経済循環が悪く、町の産業の基盤が崩壊
- ・産業に偏り

新たなビジネスを起こし、地域経済循環率をあげる必要性

他地域の人にも働きにきたい×世界から注目される

理想



環境ビジネス・アカデミーをおこし、新たな町づくりをする

双葉郡全体をブランディング

シビックプライド

エネルギーの町

エコロジーな町

シビックプライド

自分の地域に対する誇り 自身が関わって地域を良くしたいという思い

- ①自分の町が好き
- ②他地域からも羨ましがられていることの自覚

永住や他地域の人に勧める意識ができる

意識
いい町だという自覚があり、他地域の人からいつまでも羨ましがられたいために、時代の変化に合わせて町がよくなるための協力を惜しまない

町の良さに対する概念が共通している

なぜ環境ビジネスなのか

①国際的に環境対策が重要視されている

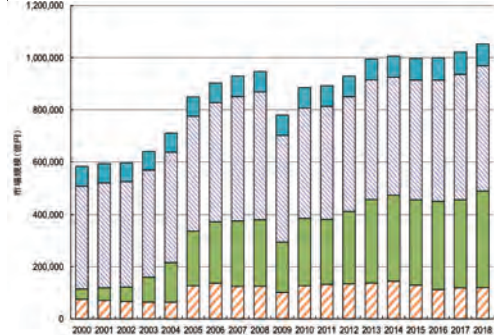
- ・SDGs、パリ協定、ロンドン条約などの国際環境条約の締結や目標
- ・EUプラスチック戦略
- ・各国でレジ袋、プラスチック容器、ストロー、カトラリーなどプラスチック製品の販売禁止や課税・有料化
- ・中国の廃プラスチック、廃電子機器などの輸入停止

etc etc・・・

②環境ビジネス市場の拡大

環境産業の市場規模推移

環境省 環境産業の市場規模・雇用規模等の推計より



2016	2017	2018
113,350	119,626	120,326
337,996	337,970	370,712
462,769	479,147	478,165
85,199	85,172	83,999
999,313	1,021,915	1,053,203

約30,000億円

環境省によると、2050年にかけて規模は上昇傾向を続け、約133.5兆円まで成長する推計

将来性がある

年々市場規模が増加している

ブランド紙で町のイメージUP・再生プラ事業で地域活性

廃棄してきた農作物を紙にする

○広野町：ブランド『朝陽に輝く水平線がとても綺麗なみかんの丘のある町のバナナ』
→葉や茎を利用したバナナペーパー

○広野町・檜葉町：耕作放棄地
→雑草を利用した紙づくり

○広野町・檜葉町：田んぼ
→稲わらを利用した紙づくり



他にも考えられる紙資源

やまゆりの葉 ゆずの皮

そば殻 北限のみかんの皮

ブランド紙で地域のイメージUP

再生プラ産業で地域活性

○世界から廃プラ回収で町おこし：回収用タンカーの造船
→造船業と造船用鉄鋼業誘致と船員で人口増加

○プラ再生事業で町おこし：プラ化学工場、プラ製造工場、プラ学術研究機関・大学
→地球温暖化による海面上昇の防波堤としてプラ利用と研究
→従業者、学生で人口増加

○LNGガス発電と海水利用で町おこし：プラ再生事業には電気と真水が不可欠
→発電設備従事者とメンテナンス事業者で人口増加

○建設ラッシュで町おこし：従業者や家族が暮らしやすい町に
→人口が増えれば定住者のための様々な設備が必要

○商業で町おこし：増えた人口を賄うための様々な商業施設が充実
→商業従事者で人口増加

○交通で町おこし：増えた人口の利便性のために私鉄誘致
→福島で唯一の私鉄でより発展

○娯楽と観光で町おこし：工場の排熱を利用して大磯ロングビーチのような施設や
ホテル・旅館などの宿が可能
→県外来町者で発展

○農業・漁業で町おこし：プラ人口島で守られた内海で様々な養殖が可能。
増えた人口を賄うための農産は必要不可欠。

○まだまだ町おこしになる出来事がたくさん。
シビックプライドを持つ住民参加による地方創生がカギとなる！

 **町そのものが世界に売れる** 

未来を担う人材を ～記憶をつなぐプロジェクト～

メディアコミュニケーションゼミ

2年 小野澤彩乃 渡辺あさひ

きっかけ

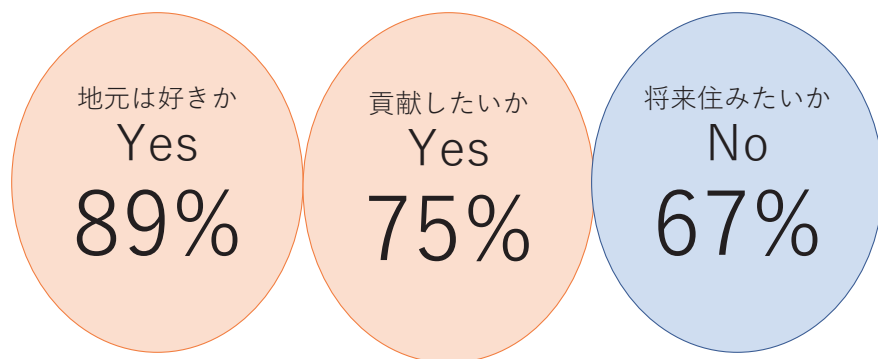
- 過疎化が進んでいき、地元が廃れていくことを防ぎたい

➡ 情報発信を行い、知ってもらう

- 私達も震災の記憶と教訓を伝える活動に貢献すべき

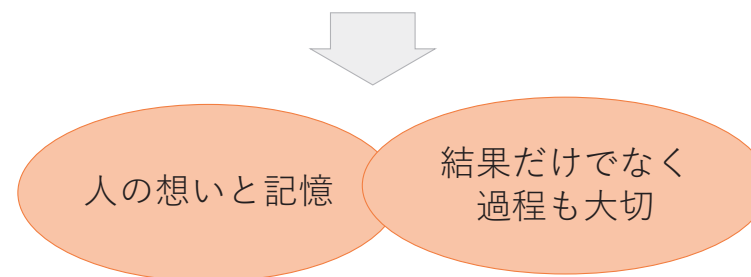
アクションその1 ～アンケート～

ふたば未来学園の中学生



アクションその2 ～施設見学～

視点を考えるきっかけになった



アクションその3 ～意見交流～

高原さんの授業から

- 伝えるだけでなく、伝えられた側の視点も必要
- どのような手段で意識を高めていくか

フィッシュボール

- 高校生に何ができるか

アクションから得たこと

教訓と記憶を後世に伝えていくことが必要



これからも続いていく
機会づくりを行う

これからの活動

- 同世代の高校生向けに伝承館を中心とした双葉郡ツアーを行う
- 他校の災害関係の探究を行っている高校生と交流
- 双葉郡出身の高校生と交流（オンライン）

正しい情報を、私の言葉で

目的

- ・福島の実状や課題を伝え、復興に携わる人々を増やす

動画の概要

概要

- ・一本の動画の長さは三分以内に収める
- ・動画の内容＝視聴者が必要としている情報
- ・Vlog形式で動画を作成する

対象

- ・「震災を語れる最後の世代」と言われている同年代の高校生
- ・研修先で出会った、福島の復興活動を行っている方々

背景・動機

放射線防護ワークショップ

- ・今の私にできることは福島や原発についての正しい情報を身につけ、それをふたば未来学園の生徒という立場から伝えることだと考えるようになった。

広野火力発電所見学

- ・メディアが事実とは異なる情報を発信していたり、伝えきれていない情報があることを知った。

宮城教育大学さんとの交流会

- ・私達の日常の中に、他県や他国の方たちから見ると珍しいことや驚くべきことが多く存在していることを知った。

プレ発表での 気づき

反省

- 人が集まらなかった

課題

- どのようにして自分の探究活動を広めていくか

解決策

- SNSを利用して、活動内容を発信していく
- 他の探究班の活動の中で動画を使用してもらう
- 研修先での広告活動

アクション

1. 学校紹介動画作成

2. 阪本先生との交流会

アクション

3. 水俣研修

4. NY研修

今後の活動

①

②

③

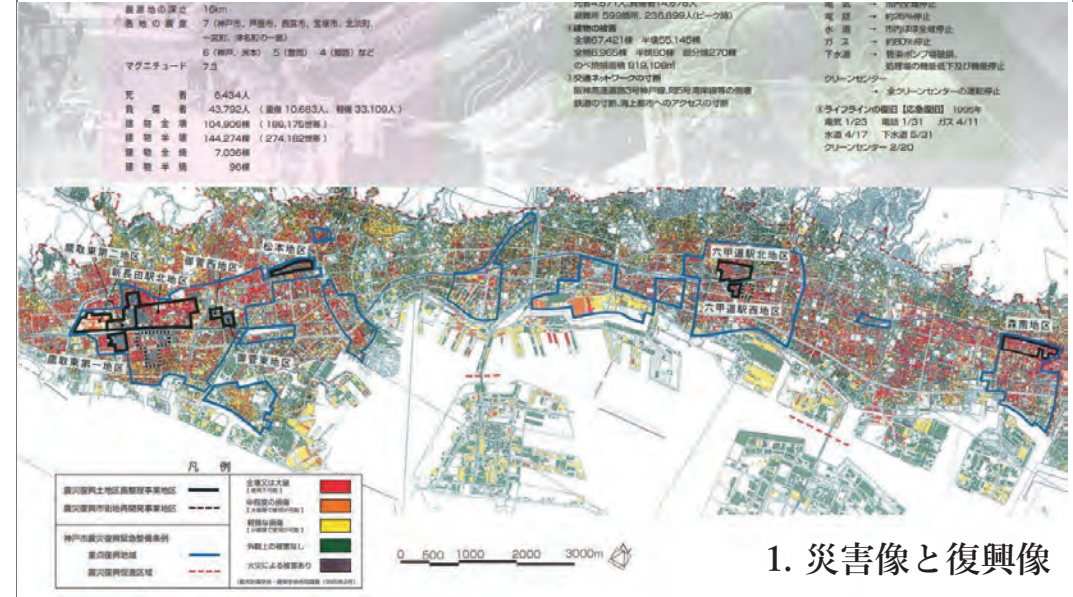




写真： 人と防災未来センター西館（2021/1/8朝 発表者撮影）

〈語りたい〉と
〈語れない〉の
あいだで
神戸の経験から

2021/1/24
第7回ふくしま学（楽）会
高原耕平（人と防災未来セ
ンター主任研究員）



1. 災害像と復興像

1. 阪神・淡路大震災の災害像・復興像

- 被災は生活の破壊だった
- 都市の構築物全体が被害を受けた
- ただし基本的な地形や都市構造は維持されていた
- 自力再建が基本
- 短期集中的にリソースを投下
- 同じ市域にそのまま、震災前より「発展した」市街地を再形成
 - 戦災復興の記憶がベースに（eg. 神戸空港）
- 復興＝「生活・産業再建」「都市再建」「記憶／物語の獲得」の3重旋律
 - 微妙な不協和音と相互依存

2. 人と防災未来センターの来歴と機能 おおざっぱな概要



7階建て、西館+東館（2Fまで）
2002年開館、年間見学者50万人



年8コース
300人

6機能が相乗効果

収集・展示機能

所蔵する資料 2020年3月末現在

一次資料
総数 192,849点

- モノ** 14,594点
5時46分で止まった時計、ボランティア基地や仮設住宅の看板など
- 紙** 185,193点
被災者の日記や手記、避難所の日誌・チラシ、ボランティアの活動記録など
- 写真** 51,671点
倒壊した建物や被災したまちの風景、仮設住宅、救援やボランティア活動の様子など
- 映像・音声** 3,093点
被災者が撮影した震災時の映像、地元コミュニティFM局のテープなど



3D館内見学できます！
<https://my.matterport.com/show/?m=txyPCAEMum3>

二次資料
総数 42,899点

- 図書** 14,594点
阪神・淡路大震災関連資料、災害・防災関連図書、地域防災計画書、各種写真集、震災関連一般図書など
- 雑誌** 20,145点
学会誌、建築・自然科学系雑誌、防災関連雑誌など
- 映像** 976点
阪神・淡路大震災や防災関連の映像資料、音楽や音声が収められたCD、CD-ROMなど
- その他** 6,984点
地図、リーフレットや広報誌、ちらし、防災計画ガイドラインなど



資料室
(西館5F)



震災資料専門員
(修士クラス、定員4名)が常駐

資料収集・保存の経緯

- 兵庫県が1995年10月から資料収集を開始
- 2000年から2年間、兵庫県の「緊急地域雇用特別交付金事業」により、のべ約450人の調査員が資料を収集→2002年に開館
- 発災直後から「これは残しとかなあかんのとちゃうか」という姿勢（＝用途や理由は後回し）
 - 断絶した歴史感覚・時間感覚を取り戻そうとした？
- 資料寄付は現在も受付中。「お焚き上げ」機能??

展示・学習施設としての特徴

- 1次資料（モノ資料）＋映像の訴求力の強さ
- ストーリーの明確さ、一方通行の館内見学コース
 - 発災の衝撃→混乱（被災市民の苦境、悲嘆）→助け合い・復興→防災学習
- 語り部ボランティアの独立性
 - 130人のボランティアが登録。
 - わりと自由（運営主体である兵庫県などへの不満も普通に語る）
 - 高齢化
- 学習機能の強さ
 - 地域内外から校外学習や修学旅行で来館
 - 語り部講話1024回（H30）、研究員による防災セミナー55回（H30）



3. 世代と物語

2020.1.17 5:41 (発表者撮影)
西宮市立高木小学校
・ 校区内震災死者77名
・ 内、児童5名

学校敷地内にモニュメント
町内会・PTAが花壇などを準備
地域住民、児童生徒、教員
時間をズラして遺族も

体験世代	震災学習世代
- エピソード記憶 - 語りづらさ+饒舌 - 責任感、使命感、行動 - 語りのフォーマットの受容 (手記、語り部) - 体験や苦闘を時間をかけて「過去」にしてゆく	- 中間記憶 - 聞きづらさ+語りづらさ - 責任感、距離感、迷い - 聞き方のフォーマットの受容 (学習、防災) - 自分自身の未来にどう接合するか、さらに下の世代にどうするか

体験世代の「物語」 (阪神・淡路大震災の場合)

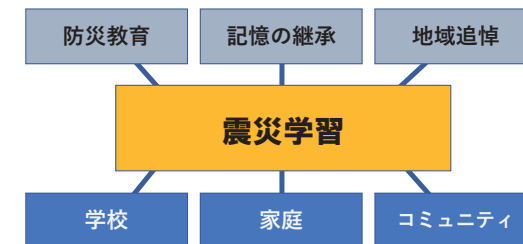
- ・ シンプルな「復興の物語」 (「たいへんだったけど、がんばって復興した」) が期待される (特に公の場、行政)
- ・ 反転形として「行政はわかってない、本当はまだまだ復興してない」という語り方
- ・ 〈語り方〉のベースがあるから語りやすい／語りづらい

語りづらさの正体？

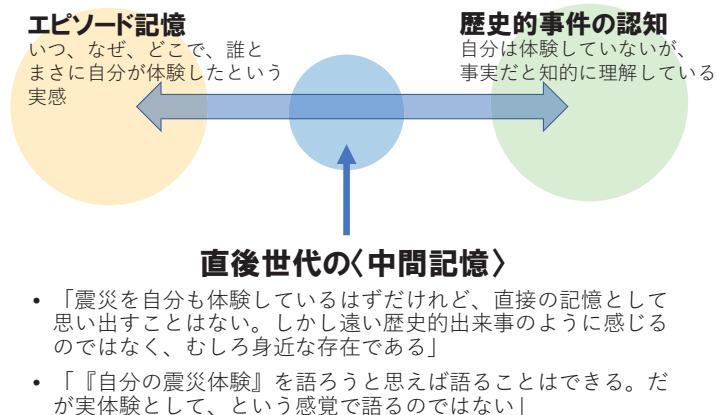
- 26年間、いろんなひとがいろんな仕方で語ってきた
- 手記も膨大に書かれた（筋立てが基本的に共通）
- しかし「話せないわけでもないけど…」というひとが**大多数**
- 「語ること／語らないでいること」を微妙に封鎖する雰囲気
- 偶然性と罪責感、経済格差
- 「いつまでも被災者ヅラするな」という反応への恐れ
- 「心のケア」流行への反発

震災学習世代の模索

- 震災直後から、被災地の学校は「震災学習」を続けてきた。
- 家庭でも、いろいろな機会に親や祖父母が子供に話してきた。
※遺族の場合は事情がまた別
- 各地域でも、おおむね20年目までは追悼行事などを維持した



「中間記憶」



家族史への組み込み＋学校での震災学習 →外傷的記憶の世代間継承

- 1 家族史における中間記憶**
 - 非典型的、ユーモア、「だから助かった」という語り方
 - 一人ずつに結びついたエピソード、記念日だけでなく生活上の文脈
 - 家族内部での選択・洗練・反復
- 2 震災学習**
 - 全体像、類型的ストーリー、地域性、死のイメージ
 - 家庭内での語りを再度促す
- 3 中間記憶の社会化**
 - 「あの社会的事件＝震災を、家族はどう語っていたのか」という視点で再解釈する。
 - 家族内部での選択や配慮を推測する。
 - 家族史において除去された記憶を外傷化して継承する。

全然自分〔生徒たちへの震災学習を〕やってないなって思います。っていうのは、まあ、確かに1月17が来れば、あの、何年目やなあっていう話を、まあしようと思ったらがんばったらできるんでしょうけど。私が、経験はして、ないに近いから。私ができる話って、覚えても記憶もないし、やっぱり。

私は0歳であった。だから、覚えてもないし。あの、ほんまに、そういう哺乳瓶が割れたとかなんか、泣いて起きたらしいわっていう話しか。なんか実のある話ができないなあっていうのがあって。

なんか、しようと思えば例えば、「私の親せきの話やねんけどな」とか「お世話になった人のこう、話やねんけどな」とかって「こういうことが大変やったらしいわ」って言えるんでしょうけど。それってなんか、又聞き？やなあって思って。(Fさん)

神戸の経験から①

- 「教育」「家庭」「地域」が協力しあうと、「継承」は成功しちゃう。
- けれども、「継承された側」はそれなりに悩む。
 - 「自分もさらに下の世代に話すことを期待されてる？」
 - 「直接には知らないのに話していいのか」
 - 「かといって、大切なことなので…」
- たぶん、語ってきた側は、新しい世代のこうした悩みを事前に想定はしていなかった。
- 重荷かもしれないし、新しい創造性や可能性の種かもしれない。

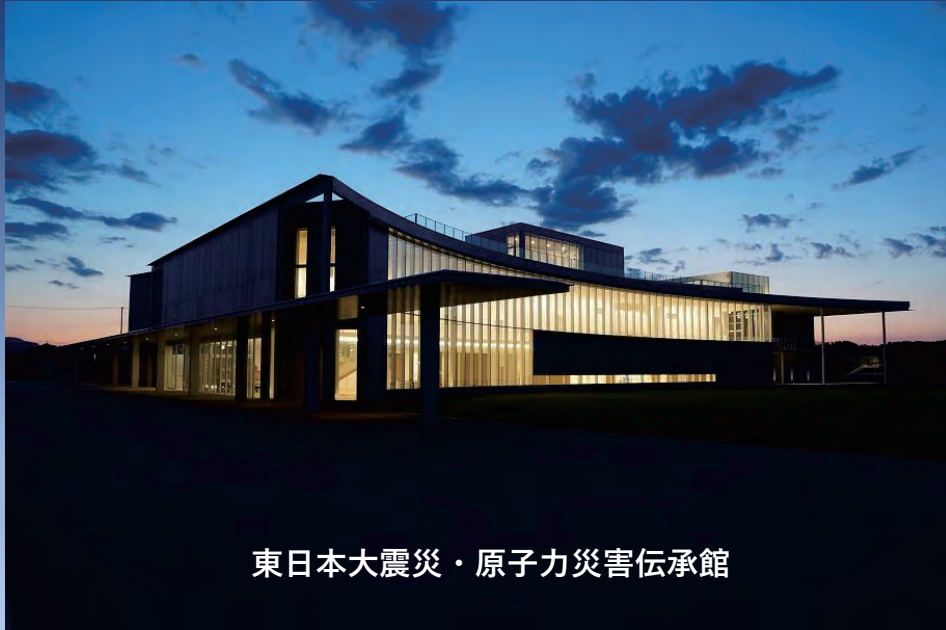
神戸の経験から②

- 阪神淡路大震災の被災地域では、「教訓の継承」と「記憶の継承」がゴチャまぜに使われてきた。
- しかし「教訓」と「記憶」は同じではない…。
- 教訓
 - 役に立つ（≡役に立たない話は要らない）
 - 普遍的（≡必ずしも阪神淡路大震災でなくていい）
 - 記憶から抽出されるが、記憶と対立しうる
 - 「何を教訓とするか」という問いが、対話の場をひらく（しかし答えは容易に出ない）
- 記憶
 - なぜか心に残る
 - 家族や共同体や世代の絆／傷となる
 - 「そのひと」「その地域」の固有性がある
 - 役に立つとは限らない

神戸の経験から③

- 阪神淡路大震災の復興と継承では「自然」は大きなテーマにはならなかった。
 - 山や海は基本的にそこにそのままあった。
 - 復興や物語の、いちばん底の基礎として保たれていた。
- 福島ではどうだろうか…？
- 「自然」の意味が震災以前と変わったならば、物語の成立にも影響が？

伝承館が語り伝えたいこと



東日本大震災・原子力災害伝承館

■東日本大震災・原子力災害伝承館とは？

- 東日本大震災と原子力災害から**まもなく10年**
- 誰も経験したことがない複合災害の**記憶と記録、**
そこから得られる**教訓、**
そして**福島が復興していく姿を、**
国や世代を超えて、**未来へ継承する施設が必要。**
- 情報発信と交流の拠点**として、県が施設を整備、
福島イノベ機構が運営
- 2020年9月20日（日）開館**

2

伝承館の基本理念

原子力災害と復興の記録や教訓の
未来への継承・世界との共有

福島にしかない原子力災害の
経験や教訓を生かす

防災・減災

福島に心を寄せる人々や団体と連携し、
地域コミュニティや文化・伝統の再生、
復興を担う人材の育成等による

復興の加速化への寄与

3

伝承館における事業

収集・保存

地震・津波の爪跡を残す資料や避難地域に残された資料、
復旧・復興の過程の資料などを収集します。
開館後も計画的な資料収集を継続し、展示資料の入れ替え
や企画展などでの資料の活用を図っていきます。



調査・研究

福島における複合災害への対応、復興に係る経験と
記録を体系化し、教訓を抽出します。
抽出した教訓を展示・研修など様々な手法で情報発信
するとともに、復興及び防災を担う人材の育成を図ります。

【主な調査・研究対象】

- ・放射線影響への対応
- ・複合災害におけるコミュニケーション
- ・複合災害における行政対応
- ・地域コミュニティの崩壊・再生と住民意識の変遷
- ・地域産業の崩壊・再生と産業構造の変遷

語り部

伝承館展示スペースにおいて、語り部による口演を行います。
語り部の方々が、地震、津波、原発事故により経験した様々
な出来事、その時々の想いを率直に語る生の声を伝えます。



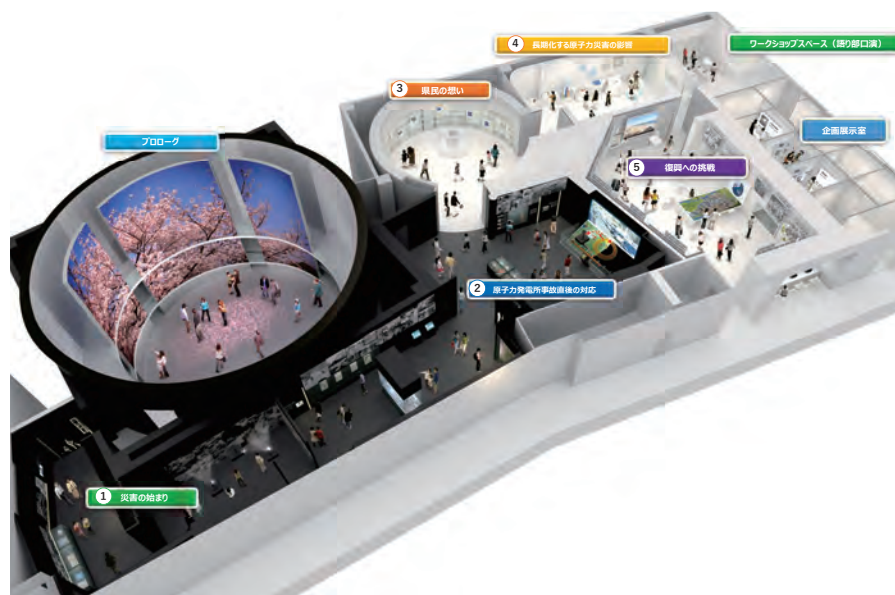
研修

伝承館の現地性を活かし、震災や原発事故、福島が
復興する姿などを総合的に学んでもらうため、展示見学、
フィールドワーク、被災体験の講話、ワークショップなど
の研修事業を実施します。
教育旅行、ホープツーリズム、企業研修等、福島に想
いを寄せる方たちに、伝承館ならではの学びを提供しま
す。



4

■ 展示エリアの概要



5

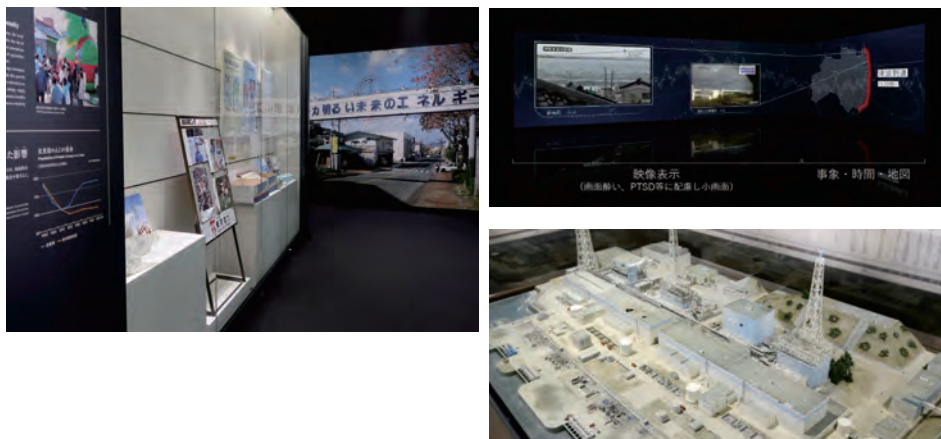
プロローグ（導入シアター）



地震・津波・原子力事故発生当時の映像とアニメーションを効果的に組み合わせた映像により、基本理念をもとにした「災害の自分事化」、「福島の実験と教訓の未来への継承」の2つのメッセージを来館者へ伝え、震災のこと、事故のこと、復興のこと、これからの未来のことについて考える入り口としての役割を担います。

6

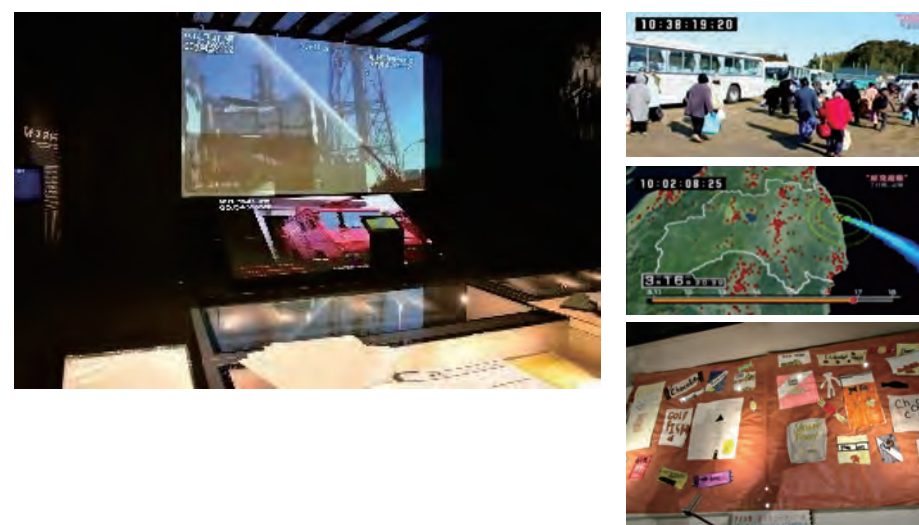
1. 災害の始まり



平穏な暮らしを一変させた地震と津波、それに続く原子力発電所事故。複合災害の発生を受け、人々はどのように行動したのか。震災前・震災当時・震災直後の状況を時系列でたどり、さまざまな資料・証言・事故調査の記録から、原子力発電所事故の始まりを克明に描いていきます。

7

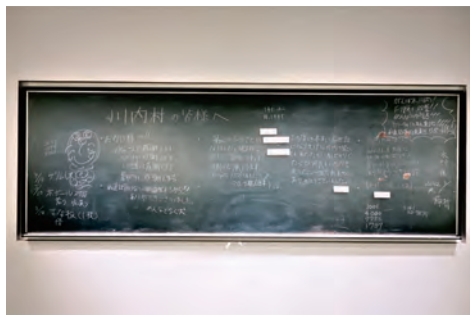
2. 原子力発電所事故直後の対応



錯綜する情報、転々とする避難生活。これまで経験したことの無い原子力発電所事故発生直後の状況やその特殊性を、避難などの様子に焦点を当て、さまざまな資料や証言などをもとに振り返ります。

8

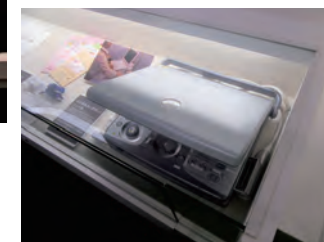
3. 県民の想い



平穏な日常が複合災害によりどのように変わってしまったのか、県民の想いを証言と資料を組み合わせで発信します。
特に、広域的・長期的な避難、あらゆる分野への風評など、原子力災害特有の事象を中心に伝えます。

9

4. 長期化する原子力災害の影響



除染、風評の払拭、長期避難への対応、健康に関する取組など、原子力災害による長期的で困難な課題に、福島県の人々が、どのように対応してきたのか、タッチパネル解説や資料を通して伝えます。

10

5. 復興への挑戦



逆境を乗り越え、復興に挑戦する福島県の姿を紹介します。廃炉作業の進捗、福島イノベーション・コースト構想などの取組から、県民が困難に立ち向かい、復興へ向け力強くチャレンジする姿を発信します。

11

語り部口演

- 震災当時の体験と教訓を後世に伝えるため、来館者に対する語り部口演を毎日実施
(午前2回・午後2回)
- 講話を分かりやすく伝えるため、元校長・警察官をスタッフとして採用



12

■語り部口演のテーマ（抜粋）

- 東日本大震災—あの日から9年が過ぎて
- あの日出来事について（避難するまでの4日間）
- 置き去りにされた動物
- 震災時の職場の様子と集団避難
- 南相馬・ある家族の2年
- 震災（津波、地震）から学んだ備えるべきこと
- 双葉の子どもたち

13

■教育旅行・防災学習向け研修

- 主に小中高校生を対象とした**一般研修**と災害対応の実務を担う方を対象とした**専門研修**を実施する予定。
- 一般研修は、**展示・語り部講話・フィールドワーク・ワークショップ**を組み合わせ提供。研修参加者が主体的に学び、考え、発信する力を養うことができる。
- 個別に選択して実施することも可能。



14

◇一般研修プログラムの全体像

- 研修の目的は「伝承」「当事者性」「他者理解・共感」
- 基本的なプログラムの内容は、「事前ガイダンス」「展示」「フィールドワーク」「講話」「ワークショップ」（全体で4時間程度）。
- 事前学習を促すとともに研修時の理解を助けるワークシートを配布する。

研修の目的

伝承	当事者性	他者理解・共感
災害の記録・記憶の伝承	社会課題を自分事として考える力の養成	自分と異なる人に対する理解・共感力の養成

研修の構成



研修の目的と構成

15

■伝承館アテンダントスタッフの声

震災当時は、伝承館近くの双葉町両竹の自宅に住み、南相馬市立大塚（おおみか）小学校に教頭として勤務しておりました。今年3月に双葉町立双葉南小学校校長を退職し、4月から東日本大震災・原子力災害伝承館に勤務しております。震災で亡くなられた方々の無念さや原子力事故による避難の辛さを多くの方に伝えていきたいと思っています。

震災当時は、双葉町立双葉北小学校の教頭でした。その後、植葉北小学校、富岡第2小学校の勤務を経て、今年の3月に避難先の田村市立瀬川小学校校長を退職し、浪江町の自宅に戻ってきました。少しでも故郷に関わることでできる仕事として伝承館スタッフになりました。来館者にとってわかりやすい説明を心がけていきたいと思っています。

震災当時は、双葉警察署で警察官として勤務しており、行方不明者の捜索等を行いました。その後、南相馬署で地域係長として仮設住宅訪問等を行い、今年3月に相馬署で退職後4月から伝承館のスタッフとして勤務しています。震災の経験や教訓を多くの方に伝えていきたいと考えております。

2011年3月横浜で被災。その後インドから派遣された国際緊急援助隊の同行通訳として、宮城県女川町で行方不明者の捜索に従事。2019年4月いわてTSUNAMIメモリアル解説員。2020年4月から東日本大震災・原子力災害伝承館スタッフとして勤務しております。現在は福島県浪江町に住んでおり、今後は東日本大震災の経験、津波災害および原子力災害の恐ろしさ、国内外からの支援について、来館者に伝えていきたいと思っています。

震災被災当時は、大熊町職員として町民とともに田村市へ避難し避難所対応に当たりました。その後、会津若松市にて役場業務再開となり、会津を拠点として、県内外へ避難された町民の現況確認及び避難先自治体との連絡調整等を行いました。H24年に大熊町役場を退職後、県外へ避難していましたが、大熊町に復興拠点ができたとから今年3月に故郷に戻りました。帰還困難区域が残る現状、原子力災害は過去の出来事ではなく、現在進行形の出来事であることを、少しでも来館者の心に残る案内をしたいと考えております。

震災当時は、南相馬市内の小学校の3年生でした。その後山形県で3年間の避難生活を送り、中学入学に合わせて地元に戻ってきました。震災当時の自分が感じた不安や不満、そこから得た貴重な経験と、地域復興を考え様々な事業に取り組んだ高校時代の経験を活かし、震災の出来事を風化させず後世に伝えたいという思いから伝承館スタッフになりました。笑顔をもっとに來館されたお客様一人一人に丁寧な対応を目指します。

震災当時は、いわき市内の小学3年生でした。今年3月に地元の高校を卒業、高校生活で学んだことの経験を生かすため伝承館スタッフになりました。東日本大震災を風化させず、私より若い世代の方に学んでもらい教訓をつないでいける伝承館にしていきたいです。

16

■現在の入館状況（1月21日現在）

33,758人

- 修学旅行や企業研修での利用も多く、約200団体、約9,000名の方々が利用
- 県内は小中高校の遠足、県外は北海道、福岡県等の高校の修学旅行で利用
- 来館者の傾向としては、ほぼ6～7割が県内の方々
県外の方々も北海道から沖縄県まで全国各地から来館



多くの方々に語り伝える「使命」

17

■最後に

- 来館者それぞれが、この複合災害を「自分事」として捉え、考えるきっかけとなる場所を目指します。
- 複合災害の記録や教訓を後世に伝え、進化する伝承館を目指します。

◇伝承館の電話番号
(0240 双葉の23 ふるさと4 震災を4 知って0 忘れず2 伝えよう)

進化・深化・新化する伝承館を目指します！

18



問われる境界知作業者の役割 ～ 災害の記録と記憶の継承とエコミュージアムを考える ～

2021年1月24日
南郷 市兵
福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校 副校長

1

福島に先鋭化して生じているとある課題

不確実な不利益とリスク分配の時代

- 不確実で混沌としたトレードオフ(二律背反)、ジレンマ(矛盾)、コンフリクト(葛藤)の中での意思決定
- 「要求・依存」「バッシング」にさらされ続ける政治

ポスト・トランス・サイエンスの時代

- 知識の民主化や、熟議の政策形成を志向した「トランス・サイエンスの時代」における、合意形成の苦戦
- あらゆる分断と対立の境界に立ち、両者を架橋していくプロセスや人材が求められる

科学者・専門家(専門知)と市民・住民(地域知)という明確に異なる二者の...二項対立を前提に議論されてきたことが、トランス・サイエンスの時代のリスク課題の社会的解決を難しくしてきた
専門家と市民との討議の「場」が有効に機能するかどうかは、専門家あるいは市民の中にこうした専門知と地域知を媒介する境界知作業者(Boundary Worker)の役割を果たしうる人がいるのかどうかにかかっている

松岡俊二『ポスト・トランス・サイエンスの時代における専門家と市民—境界知作業、記録と集合的記憶、歴史の教訓』(環境情報科学, 2020)

「立場・価値観の違いによる深刻な分断や対立を
止揚する、協働的ネットワーク構築力」を育成

ふたば未来学園重点育成資質・能力(2020～)



福島民友
2020年10月24日

福島民報
2020年10月29日

2

学園での学習1：演劇創作を通して地域の課題に向き合う

グループで、町役場、商店、東電等を訪ね、復興に向けて地域が抱えている課題を調査し、その課題を演劇の台本にまとめて表現。

- 分断・対立の構図に第三者として触れるアレント「公平性(非党派性)は、複数の他者の複数の観点(viewpoints)を考慮することによって獲得される」

- 演じることで状況に参加(追想)し、問題を我が事として捉える。



【対話劇を創ろう①】問題・登場人物を設定する

問題(運命)：複数の人が抱える運命、対峙や意見が分かれやすい問題
※主人公ひとりではなく、中心部が抱える問題、外部的要因ではなく内部的な問題・悩み

内部(3人くらい)：中核になる集団、問題を抱える人々	
名前	役割(どんな人？どんな考え？) ※考え方や立場の違いを詳しく

中間部(0～2人)：内部と関係のある人々	
名前	役割(どんな人？どんな考え？) ※考え方や立場の違いを詳しく

外部(2～3人)：問題をもちこたす人々、問題を混乱させる人々	
名前	役割(どんな人？どんな考え？) ※考え方や立場の違いを詳しく

- 2020は、より語り手の個人的エピソードの丁寧な取材と表現に力点(ワークシートを使わず)。「構造的・本質的問題への着眼」を目指す一方、「ステレオタイプへの当てはめ」や「安易な教訓の抽出(語り手の記憶の横断)」に陥らないよう、カリキュラムも試行錯誤
- 各年度20班が創作、これまでに120(6期生分)の演劇を蓄積

3

学園での学習2：地域課題解決プロジェクトの実践(未来創造探究)

～ 地域復興の探究と実践を通して、持続可能な社会を考える

- 演劇等で見つめた地域の課題を踏まえ、現状と理想のGAP(問題状況)から課題を設定し、課題解決のプロジェクトを実践。
- 双葉郡の課題と持続可能な世界実現の課題とを重ね合わせながら、実践を進める。

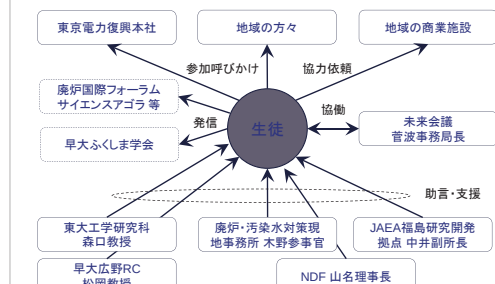


中学生探究 約80プロジェクト
高校2年次探究 約60プロジェクト
高校3年次探究 約50プロジェクト

常時約 **200** の地域での未来創造プロジェクト実践

越境と協働の例(高校生と考える廃炉座談会H29～30年)

トリチウム水の処理や、放射性廃棄物の最終処分など、廃炉作業が進んでいく中で住民生活に影響が生じるのは自明だが、専門的で難しい課題について住民が共に考える機会が少ないことを課題として設定。東電や政府等の廃炉実行主体や専門家と住民が対話を重ね、社会的な合意を形成しながら廃炉を進めていくことを目指し「高校生と考える廃炉座談会」を主催。



※本校生徒・教職員との協働は限られた主たる連携先。記載の右書きは活動当時のもの。

4

専門家(専門知) 地域(地域知)

Boundary Work(er)

立場・政治性・世代の分断を止揚し、
境界知や創造的な社会を
実現しようとする 境界知創造活動

記録

記憶

教訓

未来
創造

物理的な現象について膨大なデータを収集しそれをつぶさに検証したとしても、
災害とは何かについて明らかにすることは難しいだろう。・・・
それは、その出来事を実際に生きた体験者によって
出来事の記憶が語られることで初めて明らかになる。

岡部典香「災害の社会的な記憶とは何か」(災害と厄災の記憶を伝える、勁草書房、2017)

アーティスト・若者(学生・ふたば未来中高生)

ふたば未来学園の生徒の行動様式 ※アーティストの行動様式に類似

- 混沌とした世の中を観察すること
- 現状を良しとせず前例やタブーに囚われずに問いを発すること
- 組み合わせたり試したりと対象をいじくりまわして(TINKERING: 思い付くままに
あれこれ工夫を重ねて改造を行っていくこと)試行錯誤を繰り返すティンカーであること